

氏 名	やま ぐち きよ こ 山 口 潔 子
学位(専攻分野)	博 士 (地域研究)
学 位 記 番 号	地 博 第 14 号
学位授与の日付	平成 17 年 3 月 23 日
学位授与の要件	学 位 規 則 第 4 条 第 1 項 該 当
研究科・専攻	ア ジ ア ・ ア フ リ カ 地 域 研 究 研 究 科 東 南 ア ジ ア 地 域 研 究 専 攻
学位論文題目	Philippine Urban Architectural History: Transformation of the Poblacion Architecture from the Late Spanish Period to the American Period (フィリピン都市建築史: スペイン期末葉からアメリカ期におけるポブラシ オン建築の変容と展開)
論文調査委員	(主 査) 教 授 加 藤 剛 教 授 田 中 耕 司 助教授 Patricio Abinales

論 文 内 容 の 要 旨

本研究は、19世紀末から20世紀前半にかけてのフィリピン都市空間の形成と変容を、都市の建築に焦点をあてて展望する。スペイン植民地期の街並みや石造教会群が1990年代に世界文化遺産に登録されて以来、フィリピン建築は次第に一般の注目を浴びるようになった。しかしながら、東南アジア地域研究の分野においても、建築研究の分野においても、フィリピン都市建築についての先行研究はほとんど存在しないのが現状である。

本研究は、方法論的には文献調査と現存する歴史的なポブラシオン(町の中心地)に関する長期フィールドワークに基づき、地図や図面の作成、分析等を通して、植民地期フィリピンの都市空間の社会史を描いている。時代的には19世紀末葉から20世紀前半にかけてのスペイン期からアメリカ期への移行期を扱うが、とくにこれまで顧みられることのなかったアメリカ植民地時代の都市建築空間の形成に焦点をあてている。

スペイン期のフィリピン都市では、それ以前にスペイン支配下におかれたメキシコと同様に、グリッド状の街路をもち、教会と広場を中心とするポブラシオンが数多く建設された。これは、キリスト教の布教と古代ローマ帝国時代に起源を持つグリッド状の街路をもつ町の建設、すなわち文明化の具体的取り組みが、カトリックの盟主を任ずるスペインにとって植民地を支配・領有する上での正当性の原理だったからである。スペイン人は、のちのヨーロッパ植民地権力と異なり、エンジニア、建築家、地図製作者などをフィリピンに連れて来なかった。建築に携わったのはカトリック司祭や中国人大工たちであった。したがって、スペイン期のフィリピンには建築家がおらず、建築専門の出版物も無い。そこで、本研究では、スペイン人のカトリック司祭や官吏による報告書、外国人による旅行記などの記述のうちから都市建築に関わる部分を抽出し、分析している。直接的な建築書ではないものの、これら報告書や旅行記に加えて、小説における記述も文字資料として利用している。

調査と図面作成をとおして明らかとなったのは、島国であるフィリピンにおいては、街路やブロックの形態も、町全体の規模や基本となる公共建築の種類や数も、変異型を持つことである。街路のグリッド・パターンはかならずしも厳格に踏襲されたわけではなく、本国からの物理的・通信的な距離、スペイン人人口と建築専門家の不足、異なる自然環境(たとえば細長い島における平野部の欠如)などの要因により、フィリピンの地方都市はスペイン植民都市計画の基本を取り入れながらも、独特の形態をもつに至ったことが跡付けられた。

20世紀に入り、アメリカ合衆国の戦争省による植民地支配が始まると、初めて大々的に建築家やエンジニアたちがアメリカ本国から多数招聘され、アメリカ植民地としてのフィリピンにおける都市空間の再編成が始まった。

アメリカは自らを解放者と位置づけ、「小さな褐色のキョウダイ」を植民地的圧制から解放し・文明化すべく、フィリピンの道路、衛生、教育を整備し、民主主義の殿堂としての市庁舎を建てるなど、公共インフラ、公共施設の建設と整備に着手した。さらに当時欧米で流行していた City Beautiful 論に基づく都市計画が導入されただけでなく、新たな建材や工法が

導入されたことにより、都市建造物の形態やデザインが多様化した。国内における建築教育は発展しなかったものの、政府奨学生としてアメリカの大学で建築を学んだフィリピン人建築家が活躍を始め、欧米の建築様式を移植することが容易になった。

一般に、アメリカ期にはフィリピン人と在比アメリカ人の交流はほとんどなかったとされるが、フィリピン人上流階層は強く「アメリカ化」を志向した。アメリカ期のポブラシオンでは、新しい富裕層としての農園主が社会的・経済的力を持ち、新しいデザインの豪邸を建て始めた。彼らの多くは、農園からの収入に加え、アメリカ期ならではの新しい給与職（軍人、教師、役人等）に就いており、その経済的成功の証として、ポブラシオン内の敷地を買い、様々なデザインを取り入れ、独特の「アメリカ風」住宅を建てた。彼らは、州庁所在都市やマニラ、さらには欧米を旅行し、そこで勉強したりする機会を有する階層であり、これらの経験と知識を基に新しい建築やライフスタイルを構築しようとした。

アメリカ期における個人住居建築の変容は、インフラや公共建築のように政府によるプログラムや規定、押しつけによるものではない。フィリピン人上流階層が自ら積極的にアメリカ文化を吸収しようとした姿勢の現われである。とくに地方のポブラシオンにおいて、個々の住宅建築を劇的に変容させ、「アメリカ化」させたのは、フィリピン長期定住の志向に乏しいアメリカ人に借家を提供した地元の家主たちである。アメリカ政府の改革により、新しい分野（交通、衛生、教育、公務、軍事）における上級職への門戸がフィリピン人に開かれ、経済的に安定した都市エリートが生まれ、彼らの趣向がアメリカ教育の産物であったため、好んでフィリピンの「アメリカ風」の建築が建てられたのである。

本研究の成果として、スペイン期フィリピン都市のグリッド状の街並みには地域的な変異があること、またアメリカ期の都市建築は公共建築物とフィリピン人エリートが構築した「アメリカ的」住居によって特徴づけられるものであることが明らかとなった。さらに、スペイン期とアメリカ期の対比を理解するためには、職業的建築家の有無、建築工法や建材の進歩、植民地権力がコロニアル・プロジェクトとしたものはなにであったかなどが、検討されなければならないことが提唱された。

論文審査の結果の要旨

フィリピンにおける「フィリピンの」文化の模索は、主としてマルコス大統領時代（1965～1986）、とくに1972年の戒厳令発布以降、強力に推進された。建築についていえば、スペイン期のマニラの城郭都市・イントラムロスの修復が、マルコス大統領夫人によって着手されたことが示すように、スペイン時代に導入され・発展したポブラシオン（町の中心地）の石造教会や、教会に隣接する広場、グリッド状の街並み、2階建ての木枠・石壁・貝殻障子の住居が「フィリピンの」と認識されるにいたった。

本研究は、1980年代半ば以降に広がった上記のようなフィリピンの建築に関する定型化されたイメージを踏まえて、まずスペイン期の街並み形成の歴史を概観し、次いでルソン島のポブラシオンをモデルに形作られた「フィリピンの」建築観はどこまで一般化できるものなのかを、セブ島のポブラシオンに関するフィールドワークをつうじて検証している。さらに、現存するフィリピン建築には実はアメリカ期に作られたものが多く残っていることから、フィリピン文化史やフィリピン建築史の専門家、あるいはフィリピン建築家から等閑視されてきたアメリカ期の都市空間の形成を、公共建築と住居の特徴から描き出そうとしている。

方法論的には、都市建築に関する専門的な歴史書は存在しないことから、スペイン人カトリック司祭や官吏による報告書、外国人による旅行記、メスティソ知識人による小説などにみられる都市建築に関わる部分を抽出し、分析している。また、ルソン島ならびにとくにセブ島における長期フィールドワークに基づき、ポブラシオンの地図や住居の図面の作成・分析等を通して、植民地期フィリピンの都市空間の再構成を行なっている。

上記イントラムロスと一部の古い教会を除き、フィリピン建築は長いこと学問的関心と呼ぶことがなかった。スペイン植民地期の街並みや石造教会群が1990年代に世界文化遺産に登録されて以来、フィリピン建築はようやく一部で注目を浴びるようになったが、東南アジア地域研究の分野においても、建築研究の分野においても、フィリピン都市建築についての先行研究はほとんど存在しないのが現状である。こうしたなかであって、文献調査とフィールドワークに基づきまとめられた本研究は、以下の点において先駆的な研究として高く評価できる。

- 1 行政報告書、旅行記、小説などの多様な文献を駆使し、さらに独自に作成したポブラシオンの地図、古い石造住居の

図面などを基に、フィリピン都市の建築史を多面的かつ立体的に再構成した。

- 2 スペイン期フィリピンの都市は、スペイン期メキシコの都市建築に倣い、グリッド状の街路、石造教会と広場を中心とするポブラシオンによって特徴づけられると理解されてきた。しかし、これらの形態は、スペイン統治の中心であったルソン島においてこそ観察されるというものの、他の島の地方都市についても当てはまるかどうかについては実証的に検討されてこなかった。本研究におけるセブ島でのフィールドワークによって、島国であるフィリピンにおいては、街路やブロックの形態、町全体の規模、基本となる公共建築の種類や数などは、地形を優先させた変異型がほとんどであることが分かった。たとえば、細長いセブ島は広い平野に乏しく、この島のポブラシオンは、スペイン植民都市計画の基本を取り入れながらも、独特の形態をもつに至ったことが跡付けられた。
- 3 フィリピン都市空間の社会史に関する先行研究は、とくにアメリカ期については皆無に等しい。本研究は、当該時期の建築史に関する初めての本格的な研究成果である。それも、アメリカ期の都市空間の形成を、フィリピンの文明化というアメリカのコロニアル・プロジェクトの文脈に位置づけ、交通、衛生、教育、行政、軍事等にかかわる公共建造物の社会文化的意味を検討している。さらに、この時代に普及した英語教育のもとでフィリピン人が「アメリカ化」していくなかで、フィリピン・エリートによってフィリピン的「アメリカ風」住居が創造される過程を再構築している。
- 4 本研究は、フィリピン都市空間の建築史を、スペイン末期とアメリカ期のふたつの時代にかけて通観し、対比しつつ考察している。このなかで重要なのは、建築のスタイルをたんに建築学的に分析するのではなく、両時期における職業的建築家の有無、建築工法や建材の進歩、植民地権力がコロニアル・プロジェクトとしたものはなにであったかなどを検討し、ふたつの時期の都市建築を当該期の社会・政治・経済的文脈に位置づけていることである。この意味で、本研究は、フィリピン都市建築史の地域研究的理解に寄与するところが大きい。

よって、本論文は博士（地域研究）の学位論文として価値あるものと認める。また、平成17年2月4日に、論文内容とそれに関連した事項について試問した結果、合格と認めた。